

現代社会を生態系の 限界点越えから考える

谷 誠

発表の構成

昨年末に出版した拙著「矛盾の水害対策」では、公共事業において、次を提案した
「改良をどこまでも追及するのを控える」
「多角的に検討して合意形成を図る」
これを、本発表の問題意識としてまず提起する（スライド2~10）

江戸時代の経済の基盤となっていた
自然の定常性や生態系の限界点越えについて理解する
また、この基盤原理が歴史貫通的で
現代から未来の社会でも重要であることを説明する（スライド11~31）

さらに、現代の社会が日本と西欧でどう違うのかを検討し、
日本で顕著な合意形成機能不全問題を改善し、定常性回復を展望する
（スライド32~39）

話の機会を与えていただき、ありがとうございます。
会社でご活躍の方々との付き合いが乏しいので、ご興味に沿えるのか不安ですが、
いろいろご質問をいただければありがたいです。よろしくお願いします。

問題意識

「矛盾の水害対策」 2つの提案

改良追求を控え、維持回復を優先する

資本主義が利潤拡大を属性とするので
世界的に資源環境問題を発生させる問題

多角的検討を通じて合意形成を図る

経済発展を掲げて役割を果たせば、失敗責任は
回避できる、日本特有の合意形成機能不全問題

普遍的な自然の定常性と日本の江戸時代の経済を概観し
これらにもとづいて、現代の社会問題を考える



改良追求を控え、維持回復を優先する

資本主義が**利潤拡大の無限回転**を属性とするので
世界的に資源環境問題を発生させる

伝統的な共同体社会は、個々人は協働作業の役割を果たすことで社会定常性が維持されていた。「**そこそこの満足**」を越えるような「**選択の自由**」はなかった

資本主義社会は、共同体内の「**そこそこの満足**」を**積極的に否定**し、
神の栄光に奉仕するべく働き続ける「**禁欲精神**」を条件として発生

(M.ウェーバー:プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神)

いったん資本主義が動き出すと、資本家の**相対的剰余価値**を得る活動が
消費者の**選択の自由**と資本家間の**技術革新競争**が相互に依存し合うことで回転

(柄谷行人:マルクス その可能性の中心)

その繰り返しは、**有限な資源の枯渇**へ (斎藤幸平:人新世の「資本論」)

最低限の需要を満たす生産物を供給する社会主義は、消費者の**選択の自由**を奪い、
ファッション性を欠き、消費の喜びをもたらさないので、
軍事的敗北ではなく、内部崩壊してしまった (見田宗介:現代社会の理論)

「**矛盾の水害対策**」では、対策が資本主義経済の属性が反映していることを指摘
資源・エネルギーの枯渇を防ぐ水害対策方法として、
「**改良追及の棚上げ、現状インフラの維持回復の優先**」を提案

多角的検討を通じて合意形成を図る

日本では、合意形成の機能不全が顕著
経済発展を掲げて役割を果たせば、失敗責任は回避できる傾向が非常に強い

「時間の問題」は非常に重要
制限時間を設けることは「合意形成」の否定を招く場合が多い
事業計画の是非、国会等議会審議、いずれも「時間つぶし」に終わっている

藻谷浩介氏は、毎日新聞3月2日の拙著の書評において、
水害対策合意形成に関する「矛盾の水害対策」の記述について、的確に表現している

「上流から下流までの利害関係者がテーブルについて当事者となり、
自己利益を少しずつ通し合うように選択を行い、
災害があれば維持回復への責任も少しずつ分かち合うという仕組み」
が必要だと書いている

多角的検討を通じて合意形成を図る

2024/5/1に水俣病被害者との懇談の場で、3分間で被害者からマイクを取り上げた問題謝罪に訪れた伊藤環境相は、質疑応答の場を設けるとの要望に対し、「努力する」を繰り返したが、逃げ場がなくなって初めて「実施する」と発言
ひざ詰め談判がなかったら、後で責任が問われない官僚答弁に終始したことに注意



5/1 懇談の場でのマイク取り上げに謝罪に訪れた伊藤環境相との面会
キノシタ薬品の動画を引用
<https://twitter.com/kinoshitayakuhi/status/1788149691378475215>

重要ポイント1

(懇談の)形式を**双方向に**
変えていきましょうよ
話ができるじゃないですか

重要ポイント2

努力ではなく、
懇談の場を設定は
大臣が決めていいのですよ

重要ポイント3

来年の懇談ではなく
直ちに双方向の懇談の場
が必要との発想を持たず
責任を回避する方策だけ
を伊藤氏は考えている

後日、伊藤氏は環境省幹部と「失態の経緯からみて、再懇談の場の受諾はやむを得ないが、この脱線した事態を元の軌道に戻す(なかったことにする)にはどうするか」を協議するだろう

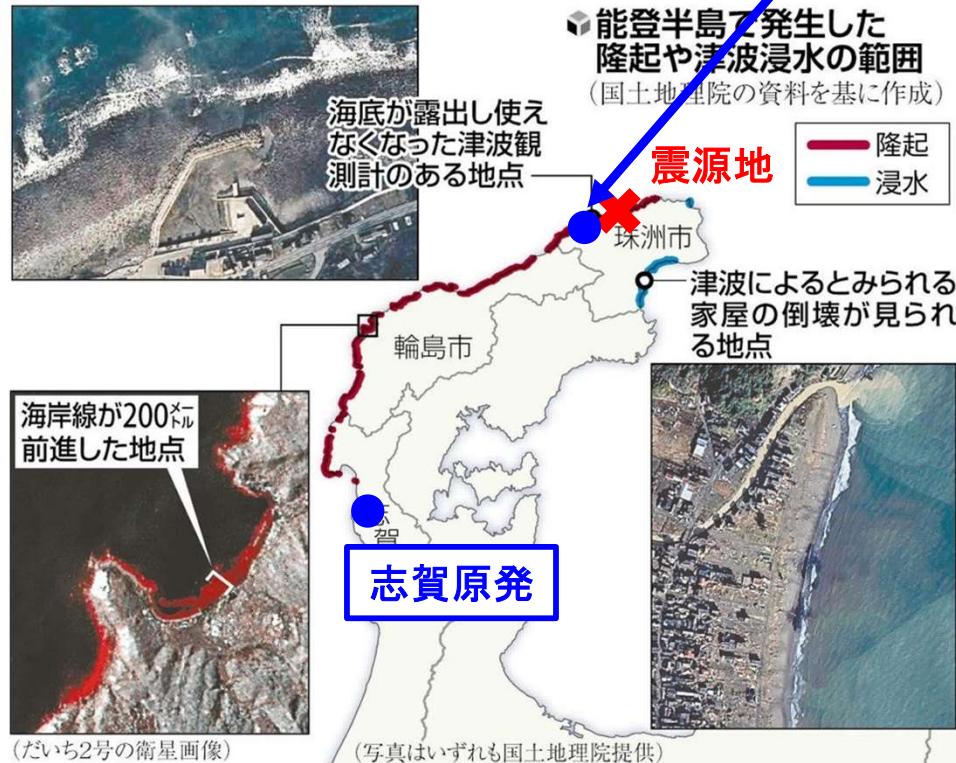
多角的検討を通じて合意形成を図る

1970年代に計画された**珠洲原発**は、電力会社の懐柔に対して、反対派・賛成派に分断
30年近い粘り強い活動で追い詰められ、2003年凍結となった
合意形成過程があったからこそ、元旦地震での地盤隆起による過酷事故が防げた

沿岸部の海底85kmが隆起して露出、海岸が最大200m海側にせり出す
...国土地理院が解析

2024/01/06 20:07
•読売新聞オンライン（2024/1/6）から引用
<https://www.yomiuri.co.jp/pluralphoto/20240107OYT1I50017>

珠洲市高屋町の
原発計画地



能登半島の海岸が約4m隆起 産総研が現地調査
Impress Watchから引用
<https://www.watch.impress.co.jp/docs/news/1560579.html>

被害者は、事業者の分断工作と賛成派反対派の共同体内のあつれきに堪え、
長期間の運動を持続することができた場合にのみ、
事業計画を撤回させる可能性が生じる

通常は「最後は金目でしょ」と押し切られる

多角的検討を通じて合意形成を図る

「矛盾の水害対策」(第1章)は、河川整備に関する合意形成の流れについて記述

長良川河口堰等環境問題の盛り上がり背景として1997年に河川法を改正
河川環境の重視・利害調整過程の重視(第2章)

2001年、国交省近畿地方整備局が
淀川水系流域委員会を設置
右図のような、**合意形成に向け、
質疑応答議論の繰り返し**を実行した

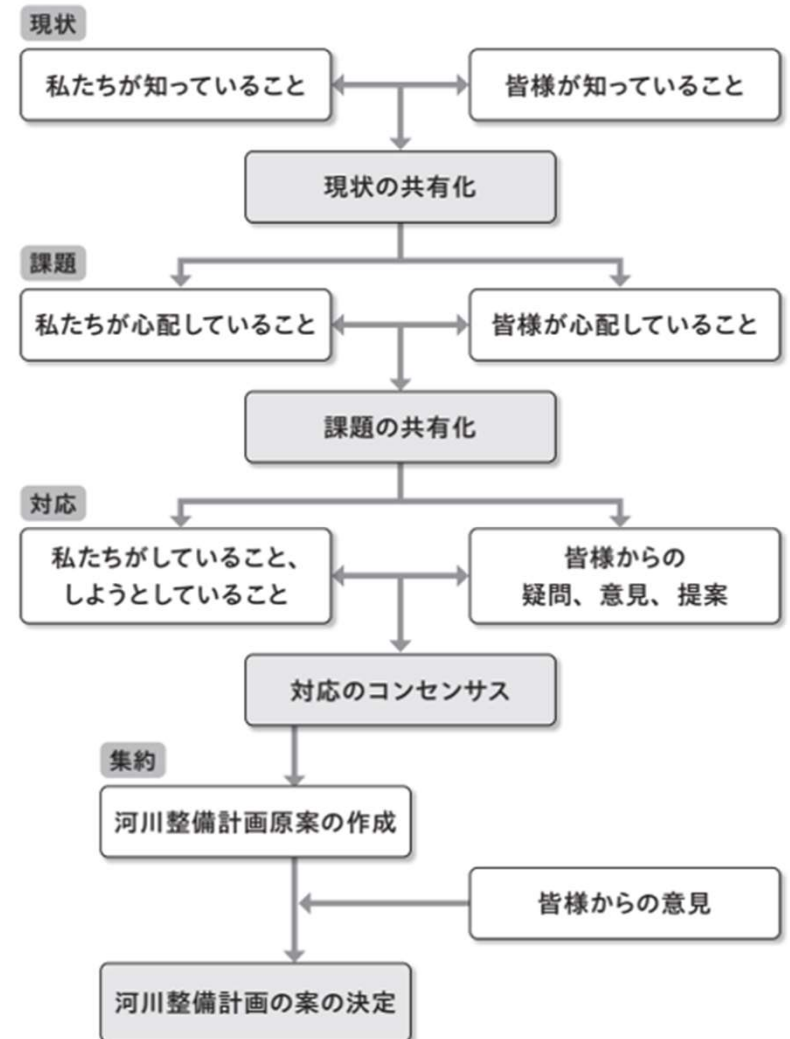
その結果、ほかに治水対策がない場合以外は
ダムを設置しない、との結論(2003年)

これに対して、国交省本省は、
降雨条件を仮定して氾濫せずに流れる流量を
増加させることを前提に、堤防とダム整備
という**基本高水流量を基礎とする整備方針
と不整合**になるため、結論を否定(2007年)

国交省は民主党政権の逆風に堪え、粘り強く
**基本高水流量ベースの治水方針に戻し、
大戸川ダムを設置決定**(2019年)

現代日本での合意形成の常設の困難性を示す

図1.1 河川整備計画策定の流れ



本発表の目的

「矛盾の水害対策」で提起された、現代日本の課題に対する2つの改善策

改良追求を控え、維持回復を優先する

多角的検討を通じて合意形成を図る

をふまえ

**本発表では、経済論争(積極財政や財政再建)を越えた基盤としての
普遍的・歴史貫通的な「自然に対する認識」を説明し、
主に上記のうち、日本で顕著な合意形成の機能不全に重点を置き、
未来への改善方法を考える**

まず、江戸時代の経済基盤はどうなっていたか？
に注目して、自然の定常性を検討したい

里山循環モデル

1. 江戸時代経済の理解

江戸時代の経済を支える里山

鎖国下、3000万の人口があり、経済活動が維持された

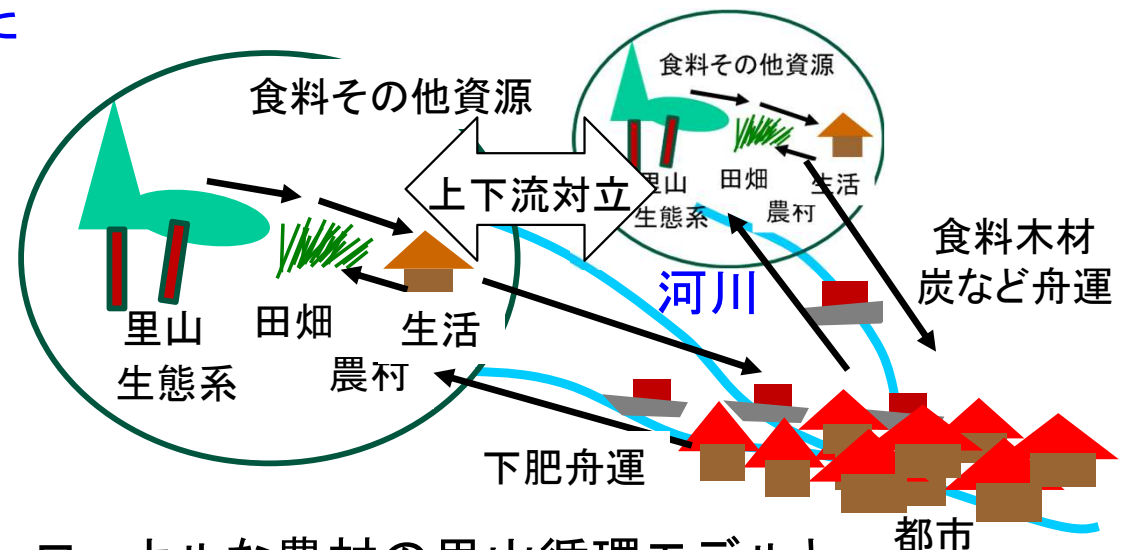
農民は、燃料・肥料を得る里山依存の物質循環の定常性に尽力
限られた生物資源をめぐる村落間対立(主に川の上下流)が常態

領主の統治機構は、村落自治による相互作用の持続性に依存
水田用排水の利害や生物資源の争奪に関する地域間対立の調整に追われた

山地森林から河川によって都市へつながる複雑な利害関係の中で、
農民は、ローカルに生産と生活を維持
領主(幕府と藩)は、農村間の対立の他、用材、舟運、都市水害防止など
多様な利害関係調整に追われた

「矛盾の水害対策」第1章に
大和川付け替え、
淀川水系の天保の浚渫
の治水事業の例を記述

次ページに簡単に事例紹介



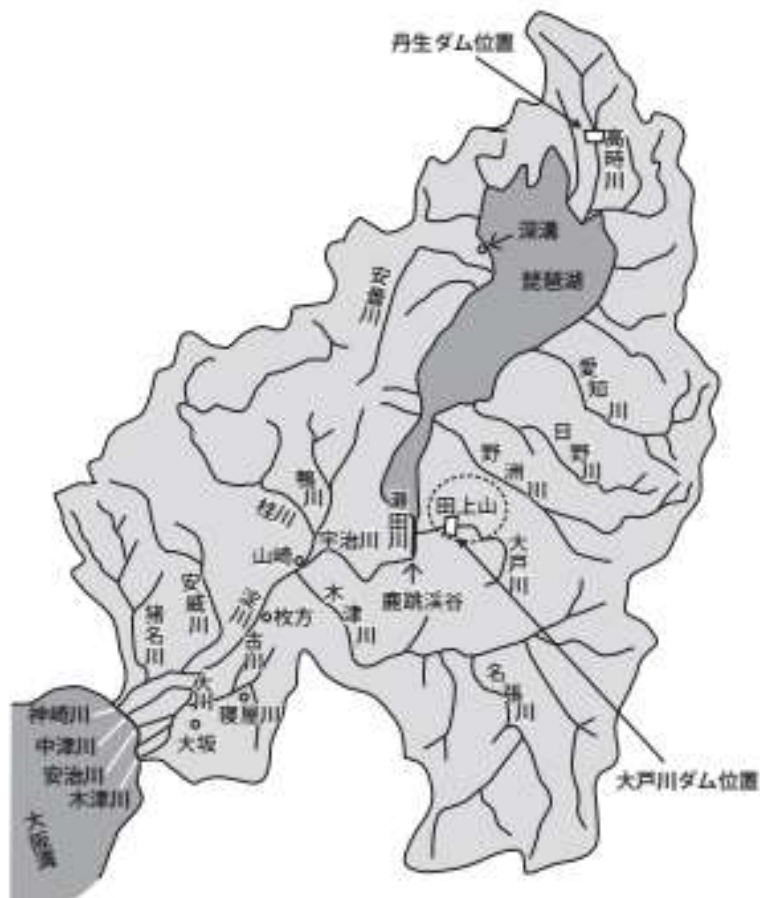
ローカルな農村の里山循環モデルと
領主の行う流域スケールの利害調整

領主による調整

諸国山川掟の公布(1666年)

土砂流出抑制のため、根の掘り取りを禁止し、
荒廃地への植林を奨励
河川の流通を遮断する行為(畑や竹萱等)の禁止
焼畑禁止

封建領主の統治機構が
農村自治に依存しつつ
下流都市、舟運、用材確保
という流域管理目的のため
森林利用拡大を禁止



文献(30)の図を基に著者作成
(注)近年計画された丹生ダム、大戸川ダムの位置も記入している

淀川流域では、琵琶湖から出る瀬田川に
花崗岩のはげ山からの土砂が堆積した

水害防止のため、その浚渫を求める琵琶湖
周辺農民と下流農民・大坂との対立が継続

幕府は、調整によって、1831年(天保のお救い大浚え)
瀬田川と大坂の河口の同時浚渫を許可

「矛盾の水害対策」第1章



滋賀県田上山に
広がっていたはげ山

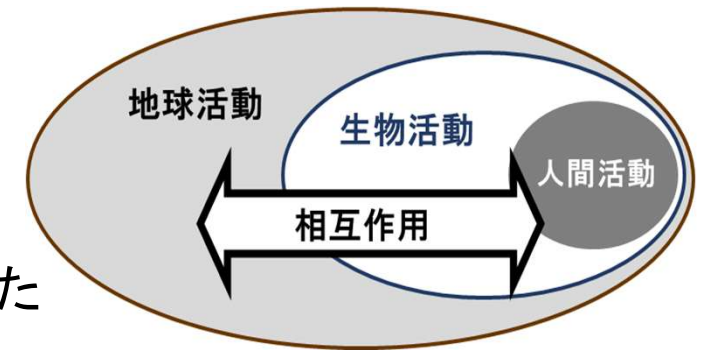
**封建領主の統治機構が
限界点越え回避に必須の
流域利害調整にあった**

合意形成を無視する今よりまだマシ？

里山循環モデルにおける限界点越え

人間社会は、地球活動と生物活動の相互作用によって
その生態系の定常性が維持できる 「矛盾の水害対策」第1章

江戸時代日本の里山循環モデルはその典型だが、
生態系定常性の限界点越えの危険性を常にはらんでいた



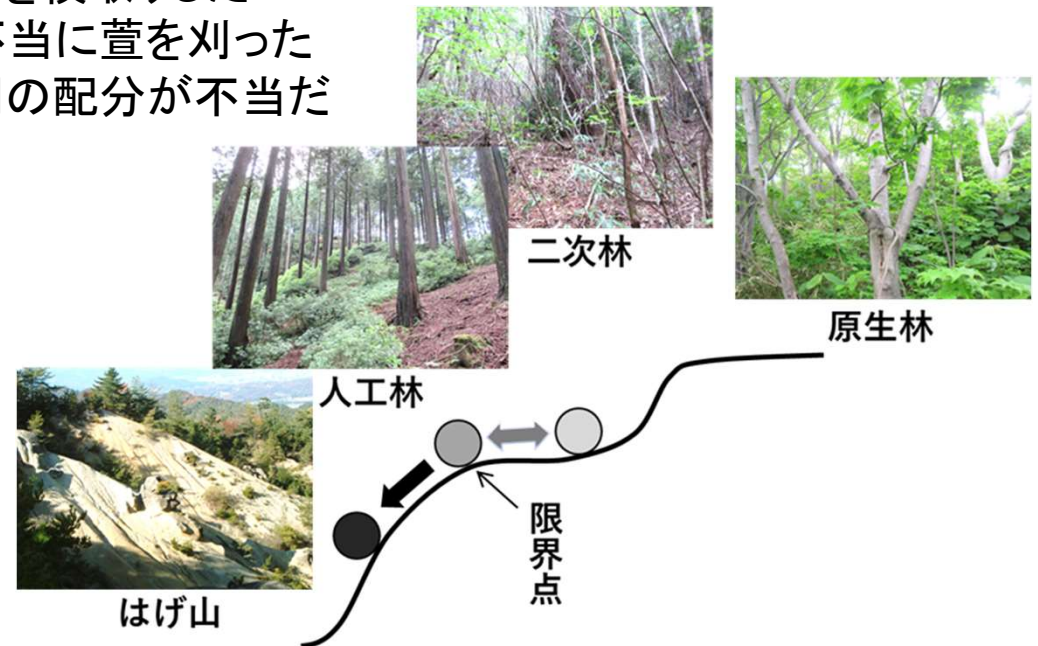
水害や旱魃などによる災害は農村間・上流下流の対立を激化させた

事例：上流が用水取り決め違反したので日照り被害が莫大になった
大水害が発生したのは、上流で土砂ざらえしたためだ
古来草刈り権利のある里山で、隣村が草を横取りした
川の中洲が大水で移動した後、対岸が不当に萱を刈った
排水路の伏せ越し(サイホン)の修繕費用の配分が不当だ

よって、資源・災害をめぐる対立、
その領主による調整が繰り返された

だが、農民も領主も
「限界点越えを意識共有」していた

対立は、この限界点越えの土俵の上で
起こるので、「痛み分け」のような
合意形成が可能であった



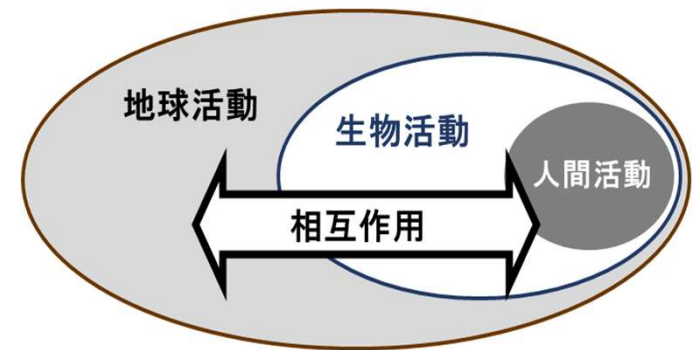
地球と生物の相互作用と生態系の限界点

里山循環モデル

2. 地球と生物の相互作用

相互作用からみた里山の位置づけ

地球は、**太陽系の一惑星として活動している**
太陽からの熱を受け、水を含む大気の高速循環
地熱による岩盤(プレート)の緩慢な循環



生物は、地球を基盤として、これらの地球活動の影響を受けて活動
重要なのは、**両者の活動が相互作用**であって、**自然の定常性**を成立させている
「矛盾の水害対策」第7章

その相互作用と生物種間の相互作用を定常に維持する海陸の生態系が成立
陸域では、**生物に好適**な日射・温度・水の条件があれば(日本など)、**森林**となる

森林は、「**背が高い**」「**寿命が長い**」ことを属性とする樹木を含む、**しぶとい生態系**
特徴1: 大量で安定した蒸発散を乾燥年でも維持、大気陸面の**水交換を活発化**させる
特徴2: 急斜面の土壌層のすべり、平地の川の乱流を抑制し、**地盤を安定**させる
それぞれ「矛盾の水害対策」の第5章、第6章で解説、**次ページで概要紹介**

人間は、森林のうち利用しやすい平地などを開発して農地・都市を作り
モザイク状土地利用が成立、山地斜面などに残された森林を生活に利用

人間生活に必要な相互作用を限界点越えにならないためには生態系が必須
強度な人間利用により、やせた土壌にしぶとく成立した貧弱な森林生態系
それが里山

特徴1: 大量で安定した蒸発散を乾燥年でも維持

陸に雨が降るのは、重力でたまっている海水を蒸発させるから
気化熱は太陽によって与えられ、余った水蒸気が陸に運ばれ雨になる

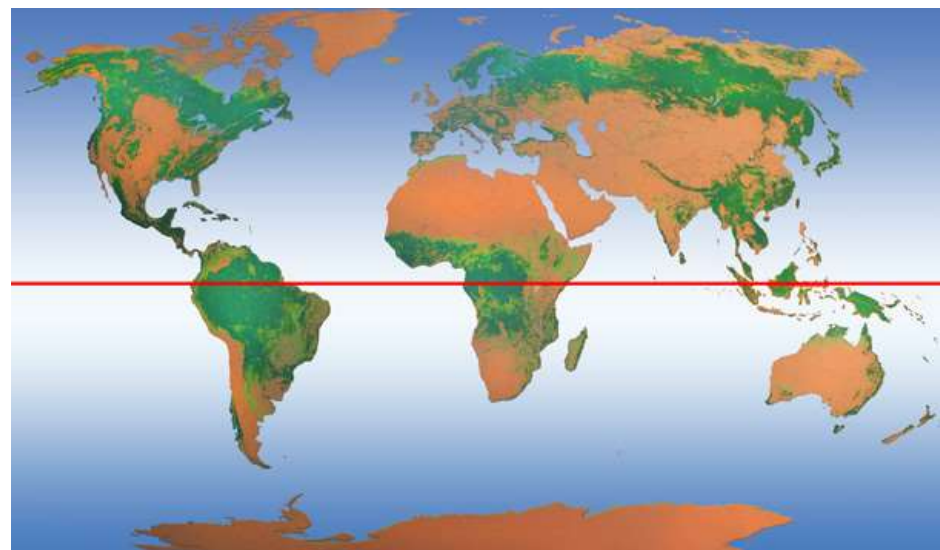
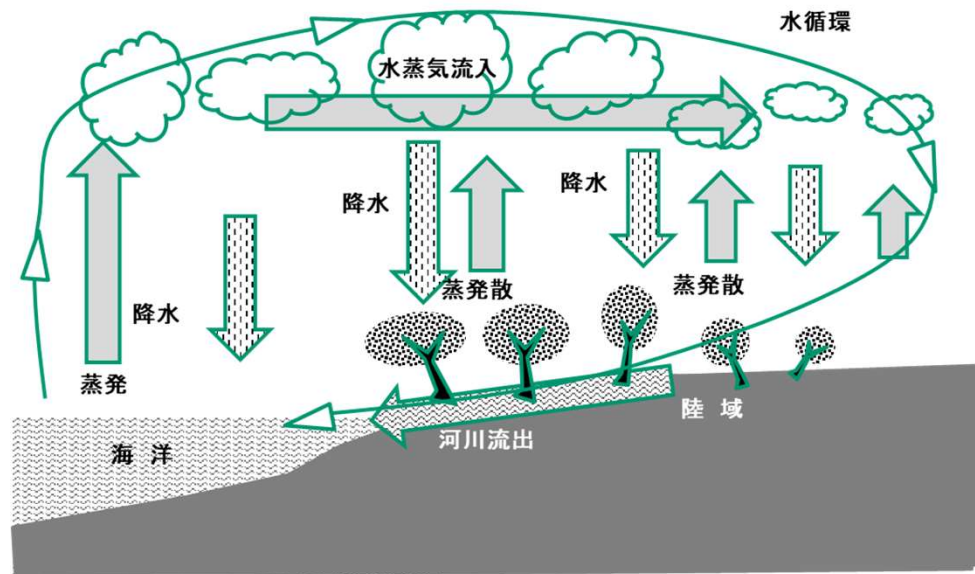
海では、蒸発 > 降雨
陸では、蒸発 < 降雨

海の上空で余った水蒸気が陸の上空
に運ばれて降雨となり、
陸面で降雨－蒸発が川の流れとなって
海に戻る（地球の水循環）

奥地に行くほど降雨が少なく乾燥する

だが、シベリア、カナダ、アマゾン
中央アフリカでは、奥地まで森林

水のリサイクルが起きている



特徴1: 水蒸気輸送を活発化させ、奥地の気候を湿潤化

図は、東経に沿う夏と冬の降水(雨や雪)の量を示す

偏西風で大西洋からの水蒸気が降水のもとになるので、東へ向かって減る

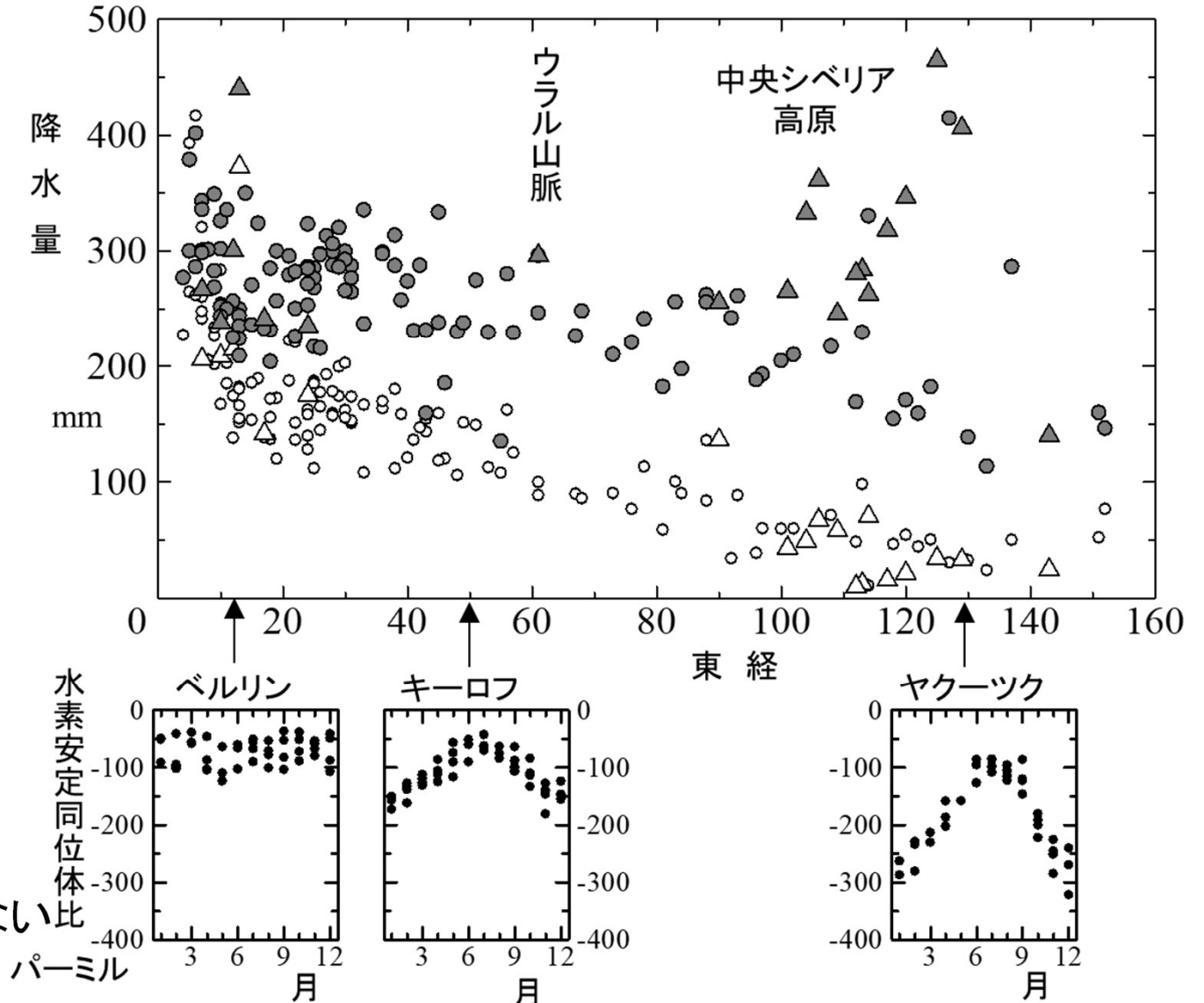
夏は冬より減りにくい

理由は風上(西側)の蒸発散によって水蒸気が供給されるため

水のリサイクルが夏に奥地に雨を降らせる
風下もカラマツ林になる

下図は水素安定同位体比
高いものが先に降水になる
風下の降水はか低くなる

しかし、夏は、蒸発で
大気に水が戻ってくるので
風下の同位体比が軽くなる



水循環と森林の相互作用が大陸奥地の気候を湿潤に

谷: 水と土と森、2016から一部改変
「矛盾の水害対策」第5章

特徴2: 急斜面の土壌層のすべり、平地の川の乱流を抑制

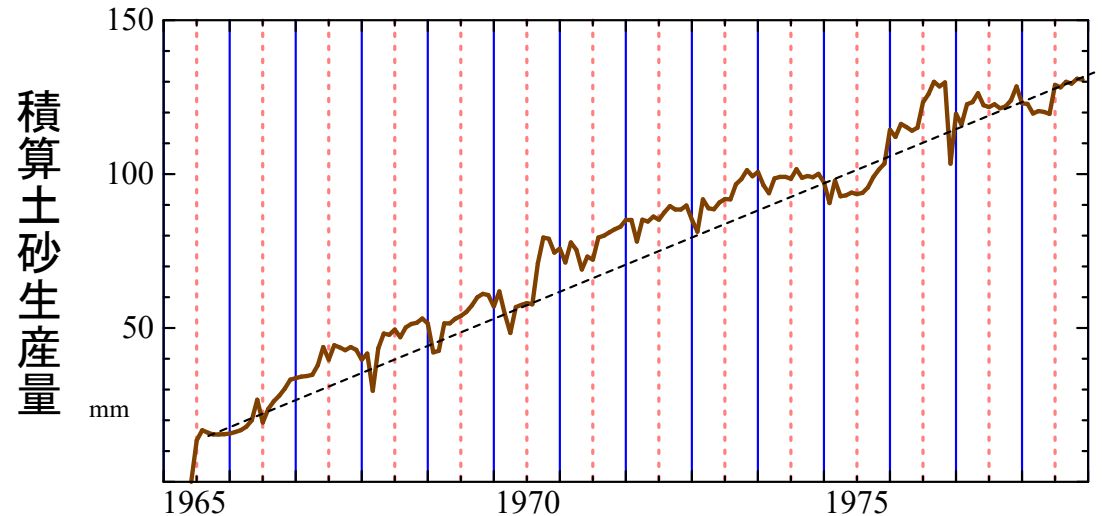
はげ山斜面



夏のはげ山下流



晩秋のはげ山下流



(鈴木・福嶋、水利科学, 1989)

花崗岩の里山では、森林利用によって
植生も土壌もないはげ山が広がっていた

冬の霜柱で、基岩風化で土粒子が浮き上がり
1年に1cm程度**毎年侵食が起こる**(上図)

梅雨頃に侵食され、溪流に堆積(中図)

晩秋には溪流が侵食される(下図)

地盤が毎年動き安定しないので植生が回復しない

(鈴木・福嶋、水利科学, 1989)

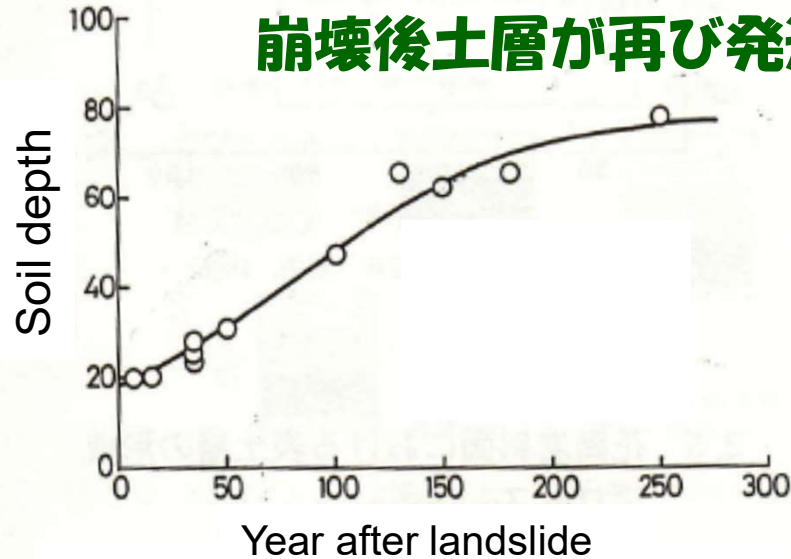
「矛盾の水害対策」第6章

特徴2: 森林は地盤を安定させる

森林斜面では千年程度に1回崩壊し、土壌層が復活



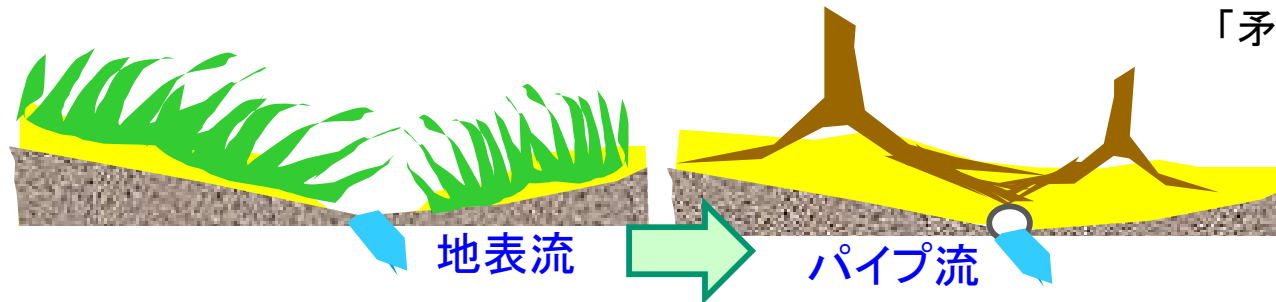
崩壊後土層が再び発達



(Shimokawa, Proceeding of Symposium on Effects of Forest Land Use on Erosion and Slope Stability, 1984)

崩壊した後、水が風化基岩上を地表面流として流れるが、樹木侵入によりその流れは地下の水みちとなり、土壌層が復活して、長期安定を保つ

「矛盾の水害対策」第6章



山岳隆起・風化により急斜面上に土粒子が生まれるが、森林と水みちができることではげ山にならず長期間地盤が安定する 山がちな日本で、人間社会が成立できる

定常状態の極端変動としての災害

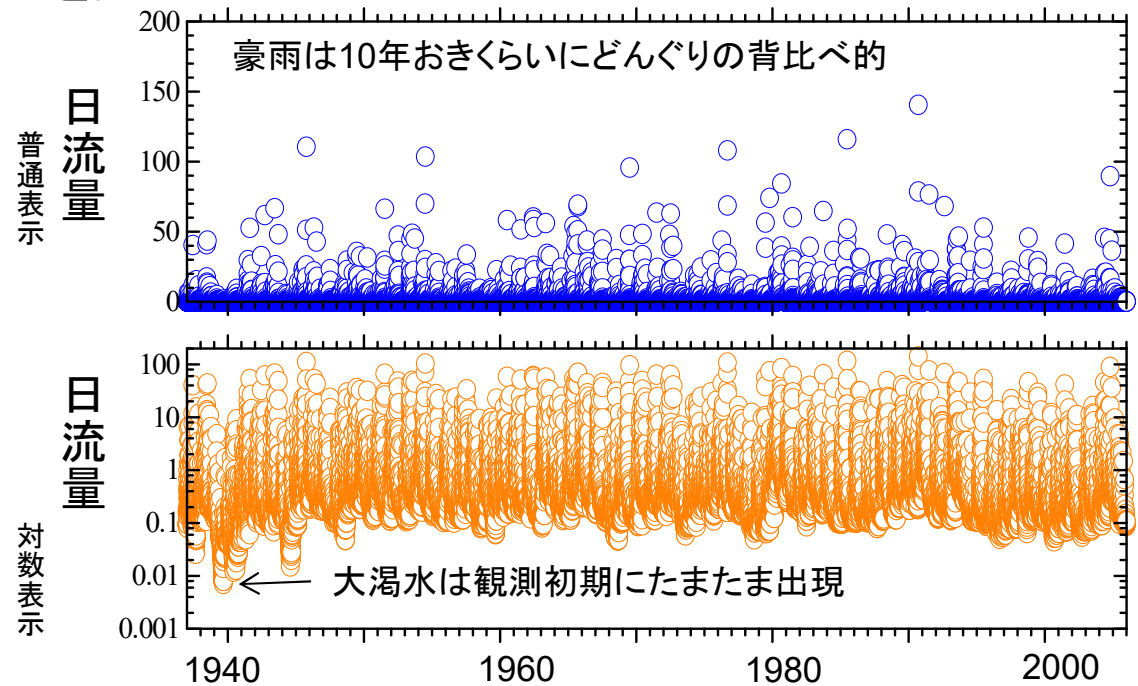
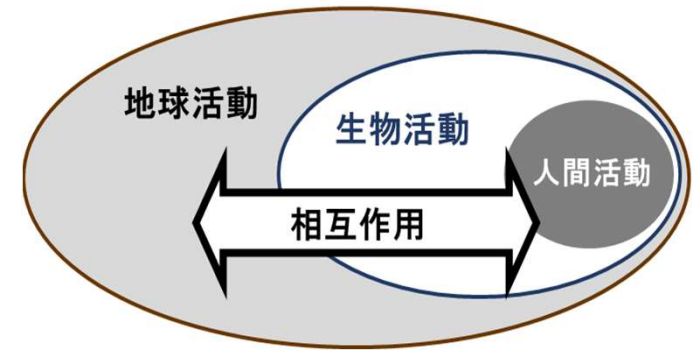
自然の定常性は、地球活動だけではなく、
生物活動との相互作用によって維持されている
ユーラシアなどの大陸奥地の湿潤気候
日本などでの地殻変動帯での急斜面上の土壌層
いずれも**相互作用のおかげ**であることに注意

この定常性は、変動をもっており
極端事象を生み出す

右図の70年間の例では。
極端な大雨は現れていない
(どんぐりの背比べ的)
極端な日照りは、1939年に出現

**自然災害が皆無にできないのは、
根本原因である地球活動が
変動を繰り返す定常状態だから**

「矛盾の水害対策」第7章



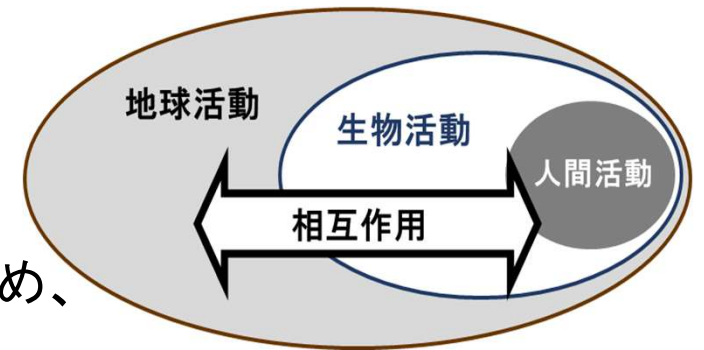
森林総合研究所森林理水
試験地データベースによる

山地の川の日流量の70年分(約2万5千日)の変化

里山循環モデルを基盤とする災害の捉え方

江戸時代の里山循環モデルに戻ろう
下記のように説明した

資源をめぐる農村間の対立、領主による調整が持続
だが、農民も領主も「限界点越え」を意識していたため、
対立は、この限界点越えの土俵の上で起こり、
「痛み分け」のような合意形成が可能であった



領主も農民も、森林が**土砂流出防止**することを熟知

森林利用が過度にわたると、**限界点を越える**ことも熟知

定常性維持の**限界点を越えて破綻しない**よう、
森林を利用すべきことも熟知

定常性の中の極端事象である
大雨、日照り、地震、火山噴火・・・
などの**自然災害は皆無にできない**
ことも熟知

(現在は、災害が縁遠くなって対策をすれば
何となくなくなるかのような誤解がある)



地球と生物の相互作用と生態系の限界点

里山循環モデル：まとめ

江戸時代は、経済発展が前提の非定常社会である現代とは異なり、
定常状態がギリギリのところで維持されていた社会であった

この社会の定常性は、地球活動と生物活動によって維持されている
自然の定常性に人間が割り込んだ場合、限界点越えの恐れが生じる

重要なことは。封建時代であったが、支配者である領主も被支配者である農民も
この限界点越えの危機を熟知していたこと

結果的に、領主も農民も、自分の役割を果たすことに努力しているが、
自然の極端変動による災害は皆無にできない、
責任のとりようがない、と考えていた

対立は厳しかったが、対立相手を征服して限界点越えを回避する、
そういう戦闘によって殺戮し合う関係は、まず起こらなかった

里山循環モデルは、経済活動の基盤として普遍的・歴史貫通的に社会に求められる
「地球・生物の相互作用に基づく定常状態の維持」を典型的に表している

里山循環モデルの 資本主義導入による変容

明治期における資本主義導入

明治維新で鎖国が終わり、資本主義経済が導入された

里山依存農業はそのまま残存

農村から産業労働者と兵隊を供給するかたちで経済が発展

経済発展のため、河川舟運、都市の水害対策など、流域管理(利害調整)は重要化

下流への洪水流出・土砂流出を減らすため、里山の国有林化、利用制限強化

(笠井恭悦、国有林の成立、林業経済研究、1986;熊崎実、水源林をめぐる上流と下流、農村計画学会誌、1984)

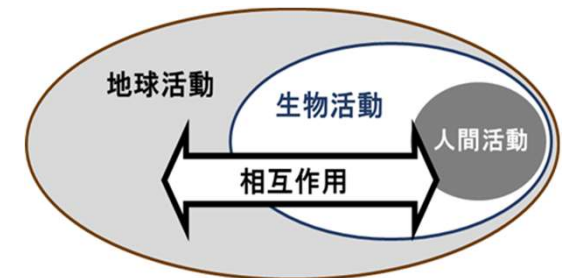
里山循環モデルにおける農村自治尊重の意識は

国の経済発展重視によって低下

地球・生物相互作用による定常性維持は
歴史家通的な原理であるが

限界点越えが、ローカルな里山から海外に拡散

**経済発展が無限に可能かのように錯覚
今に続いている**



里山循環モデルの地球規模への拡大

地球・生物の相互作用は、里山循環モデルの場合
定常性維持の**限界点越え**が見えやすい

しかし、**遠隔地貿易**、とくに、**植民地と宗主国の輸送**は、
限界点越えがないかのような錯覚を増長させる

日本の場合は、**農村の里山循環モデル**が維持されたうえで(国内植民地)、
独立に**資本主義経済**の発展が進んだ傾向が強い

見田宗介の表現 「まなざしの地獄(河出)」から引用

日本の近代化の中で、〈都会〉のために、正確には都市の資本のために、安価な労働力をだまって供出しつづけてきた、『潜在的過剰人口』のプールとしての日本の村々、国内植民地としてのまずしさのうちに停滞せしめられ、しかもその共同性を風化、解体せしめられた辺境の村々の社会的風土

里山循環モデルは地球規模に拡大したが
地球・生物相互作用と生態系の限界点越えは
歴史貫通的に継続
地球環境問題・南北問題が発生



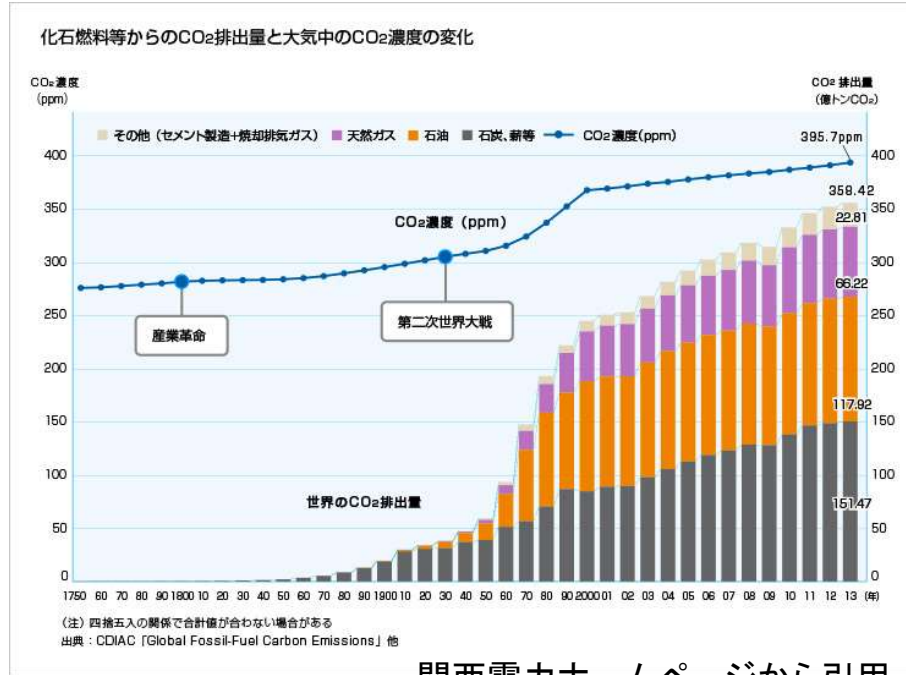
燃料革命と地球限界点到達(1960年代)

戦後の高度成長： 海外植民地は失ったが、農村は国内植民地として存続
食糧難が乗り切れたのは、里山循環モデルが生きていたおかげ

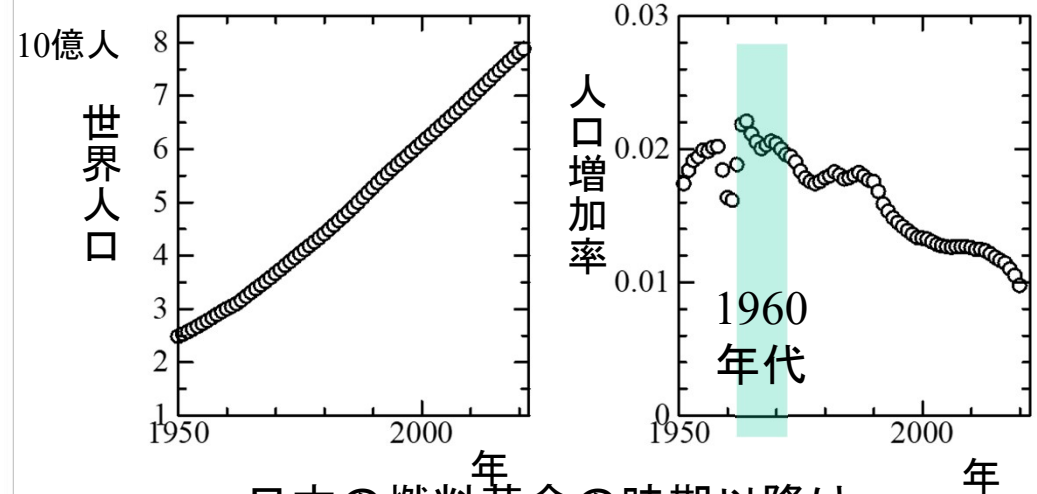
1960年代は燃料革命の時期、里山循環モデルは解体へ
村落自治による里山・用水管理が崩れて、農村の過疎化開始
化石燃料によって里山利用がなくなり、樹木成長、森林飽和へ向かう

日本型の「里山循環モデルに依存した資本主義経済」は崩壊していった
地球全体でも、60年代に化石燃料使用によるCO₂放出量が急増
人口増加率が低下を開始 **1960年代は人間史の大転換点かも？**

里山循環モデルの限界点越えが地球規模で発生 **地球限界が縮小化を強制**



関西電力ホームページから引用



日本の燃料革命の時期以降は
地球上の人口の伸び率は低下

国連データ <https://population.un.org/wpp/> から引用

今後の予想：経済破綻から飢饉へ

戦後の高度成長： 海外植民地は失ったが、「国内植民地」は存続
食糧難が乗り切れたのは、里山循環モデルが生きていたおかげ

1960年代は燃料革命の時期、経済発展と引き換えに里山循環モデルが崩壊
農村の老齡過疎化による疲弊、都市再開発による人口集中

下流都市の経済防御のために上流集落をダム貯水池へ（「矛盾の水害対策」第7、8章）
工業産物の輸出の見返りに農林業を不振化させて食料・木材輸入
残された国内農業も、海外農業と化石燃料に肥料や飼料を依存

（鈴木宣弘「世界で最初に植えるのは日本」講談社）

経済繁栄する首都圏とのアクセス競争（新幹線・高速道路）による地域経済の衰退
原発・ゴミ捨て場・軍事基地等迷惑インフラの僻地への押し付け
能登半島地震被災地切り捨てや災害後のローカル鉄道廃止などによる棄民政策

一方、資本主義経済自体も情報化にともない、消費者の生活便利メリット追及ではなく
相対的剰余価値の獲得を、無意味、あるいは悪意ある技術革新で追求するしかない

大地震・火山噴火・大河川氾濫は、地球の定常活動の中の極端変動なので不可避
加えて、外交失敗による戦争もあり得る

相互作用維持は歴史貫通的なので、限界点越えの社会への影響は確実に起こる
里山循環モデルの崩壊により、飢饉は戦災直後より、はるかに深刻と予想される
経済破綻が飢餓を引き起こして初めて、歴史家通的な自然認識が日本人に共有される

これまでのまとめ

現代日本の抱える問題として、次を挙げた

資本主義経済の利潤追求原理に基づく、改良の無限追及
日本において顕著な、合意形成の機能不全

地球活動と生物活動の相互作用の定常性の維持は、人間社会にとって
普遍的・歴史貫通的な基盤であって、人間の経済活動の土台となる

人間活動は、相互作用の定常性に割り込むので、限界点越えが起こり得る
その重要性を理解するため、鎖国化江戸時代の「里山循環モデル」を調べた

限界点越えの危険性は、支配者・被支配者に、はげ山等によって見えやすい
相互作用の定常性の極端変動としての自然災害に対して、人は責任の取りようがない
用排水・生物資源争奪の対立は深刻だったが、痛み分け的な合意形成が可能だった

明治期資本主義導入後も、農村における里山循環モデルは持続し、
資本主義経済が支えられたが、限界点越えの危機は見えにくくなった

だが、里山循環モデルは歴史貫通的な原理なので、地球規模に拡散して
南北問題・地球環境問題を引き起こした

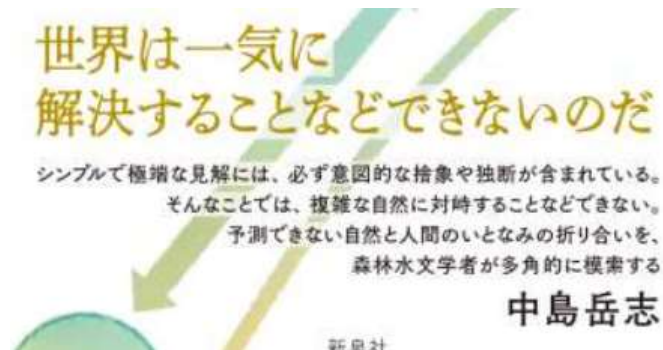
1960年代の燃料革命以降、化石燃料によって里山循環モデルは崩壊
経済発展に必須の相対的剰余価値獲得に、無意味・悪意による強制が生じてきた
里山循環モデルの崩壊している日本では、敗戦後以上に深刻な飢饉が必至

相互作用とその限界点は歴史貫通的なので、定常性の回復が最大の課題である

では、どうすればいいのか？

短期的・現実的な制度の導入

定常性回復と言っても、中島岳志さんの帯文の通り
「一気に解決することなどできない」



改良追及の抑制、合意形成の実現に向けて、
個々人が深く考え、**どうすべきかのベクトルの向きを変える**、これが現実的だろう

2種の制度改革を提案したい

1. **国民発議・国民投票**による、重要事項判断に関する**傍観者から当事者への転換**
今井一さん(ひと月万冊出演)、元山仁士郎さん(「辺野古」県民投票の会代表)らによる
INIT 国民発議プロジェクト <https://init-jp.info/> one issueでの国民判断を求める活動
問題点があいまい、人気に左右されやすい選挙に比べ、
討論深化を通じて的確な判断が可能 (例: 維新全盛期の大阪都構想は否定された)
2. 大学での**専門(研究室・ゼミ)選択**にあたっての学問と社会の関係の検討
大学(院)で学び研究する内容は、学生の個性・成長プロセスによって選択される
教員・学生相互に議論し合って、**何をやるのが望ましいか、深く考えさせる**
リベラルアーツは本来そのためにあり、教養を漠然と広めるものではないはず
谷誠: 人間社会の将来のために、<https://hakulan.com/wp/wp-content/uploads/2022/09/AXIS2C.pdf>

両者は、結論は白紙で、個々人の考察深化に判断が任される制度である

より長期(100年単位)のスケールで、**私自身が考える未来の方向性**を以下に示す

日本社会の未来

限界点越えと風土論

現代は、利潤追求による資本主義経済で世界がおおわれる明確な**非定常社会**

それに先立つ伝統的な共同体社会は、里山循環モデルのような、
地球・生物量活動の**相互作用が維持される定常状態**が基盤となっていた

ところが、そうした共同体社会であってさえ、定常性の維持は容易ではなく、
限界点越えの危機を常にはらんでいた（人間の改良欲求に由来）

日本江戸時代の里山循環モデルは、島国の鎖国という幕府による改良欲求抑制
結果、**里山循環モデルが戦闘や崩壊がなく、250年続いた**（良いも悪いもない）

相互作用維持の定常状態が**限界点を越える問題は、風土によらず普遍的**

だが、島国と大陸の「**風土の差**」は無視できない

大陸では、周辺民族との間で、**戦闘・侵略の相互関係**が常態、延長にある植民地

15世紀、大航海時代以降の、ヨーロッパ各国のアフリカ・アジア・アメリカへの進出
植民地を通じ、限界点の存在は、地球規模に拡散して忘却された

国民国家のアイデンティティーの「底の浅さ」

里山循環モデルの鎖国島国の日本では、資本主義が生まれなかった

明治期に、欧州から、資本主義と国民国家(ネーション)が導入された
アイデンティティーを国民国家日本に統一させる必要があった
天皇の臣民教育を通じ、国民国家アイデンティティーが叩き込まれた
これに基づき、日清・日露・大陸侵攻・太平洋戦争が戦われた

大澤真幸「我々の死者と未来の他者」(集英社)は、次のように論じる
このアイデンティティーは、「我々の死者」(英雄や犠牲となった死者)
として国民が共有したはずだった……

が、敗戦後、「我々の死者」を失って、「義の無い戦争」の意識に転換
敵国であった米国に依存し、経済発展を歓迎
(同調できず白けた人もいたが…太宰治「トカトントン」など)

大澤さんは、この「我々の死者」を失った日本人が
「未来の他者への負担を招く気候温暖化の抑制に関心が薄い」原因としている
なぜなら、過去・現在・未来の因果関係の必然性が認識されてはじめて
未来の他者の負担を意識してはじめて現在の欲求を抑制することができるからである

明治以降の、国民国家アイデンティティーの叩き込みは、案外、底の浅いものに終わった
言い換えれば、過去から未来へのアイデンティティーに必然的な因果関係がないと、
過去は過去、現在は現在、未来は未来、とあって、目先のことしか考えられない



国民国家アイデンティティの歴史的な由来

国民国家のアイデンティティの底の浅さが、現代日本の問題点とつながりそうだが、**敗戦後、なぜ、アイデンティティを失ったのか？**

大澤さんの説明では、この理由が十分には理解できないと、私は感じた

アイデンティティのありようには、歴史が関係しているはず

国民国家アイデンティティは、**国家対国家の争い**に由来するところが大きい

「強い方が勝ち弱い方が負け」など、勝ち負けの因果関係の必然性が問題になる

しかし、人間対自然の関係に基づく災害は、**定常性の中の極端変動**によるため、**因果関係を問いにくく**、発生は運命としてあきらめざるを得ない

相互作用の限界点越えは、普遍的な問題ではあるが……

国民国家のアイデンティティは、言語・宗教・習慣の異なる近隣民族の間で、

「相互作用定常性の限界点越え」を回避するための**資源争奪戦闘の原因**となる
(欧州・中近東・東アジアが典型的)

島国鎖国の日本では、この限界点越えを戦闘によって回避する契機が弱かった
限界点越えの厄災としての**自然災害は、責任のとりようのない運命**
共同体のレジリエンスによって生活の回復を図るほかはない

江戸期アイデンティティーに資本主義をつぎ足した構造

伝統共同体は、普遍的に、地球・生物相互作用の定常性を維持するため、
構成員は役割を果たすことが必要。選択の自由のない社会

相互作用定常性の限界点越えは里山循環モデルによって認識共有されていた
厄災は自然定常性の中の極端変動による災害なので、責任は取りようがなかった

明治期に開国・資本主義導入によって、限界点越えが認識されなくなったが、
組織で役割を果たせば厄災発生による責任は取らない構造は変わらなかった

基盤となるアイデンティティーは、江戸期のまま存続し、
天皇を軸とする国民国家のアイデンティティーは底が浅かった
定常状態における変動の繰り返しで、過去—現在—未来の因果関係がない

だが、現実社会では、資本主義経済の非定常発展が起きているので
「木に竹をついだ構造」となってしまい、

経済発展を掲げれば、現在の行動に未来の厄災責任からのフィードバックが機能しない

**結果的に、現代日本では、資本主義経済発展の改良追及を掲げれば
合意形成が為されずに未来に厄災が生じても責任は問われない**

西欧型モデルと日本型モデル

資本主義・国民国家を生みだした西欧型モデル

資本家は、欲求充足に満足せずに繰り返し利潤をめざすが、投資失敗責任を負う
国民は、積極的に、自由に商品を選択して生活向上をめざす
資本家は、相対的剰余価値を生み出すため、技術革新に努める
国家は、食料・資源・エネルギー・社会的共通資本を消費者に提供する責任を負う
必要な外交・戦闘を、国民国家のアイデンティティーに基づき責任を負う
そのため国家は、国民に情報を公開し、合意形成に努める

資本主義・国民国家を他からつぎ足した日本型モデル

国家は、国家としての役割を果たせばよく、失敗責任は問われない
国民は、資本主義経済発展のため、受け身的に、商品消費する
資本家は、相対的剰余価値を生み出すため、技術革新に努める
国家は、資本主義経済の発展を掲げるが絵に描いた餅でもよく、結果責任を負わない
国民国家のアイデンティティーを欠くので、国民に対して外交・戦闘の責任を負わない
それゆえ国家は、国民に情報を隠し、合意を求めない

国民国家アイデンティティーと資本主義経済を他からつぎ足したもののなので、
経済は発展したが、国民は役割を求められるだけで、国家は失敗責任を負わない
なぜなら、江戸時代同様、厄災が自然定常性の変動に擬せられるため

**西欧型モデルの長所が目立つが、強い国民国家アイデンティティーに基づく戦闘は短所である
日本は戦闘の常態に対して一線を画し、里山循環モデルの長所を活かすべき**

ぜひお読みください

矛盾の水害対策、新泉社、2500円
藻谷浩介さんの書評
毎日新聞2024/3/2



ホームページ(谷誠で検索)

大澤真幸「我々の死者と未来の他者」を読んで考えたことを掲載しています(「オピニオン」に載せています)

Papers Profile Top ホームページ 略歴 水と土と森の解説・論文 **オピニオン** 昭和の映像

水と土と森 谷誠ホームページ

谷誠 / 水と土と森 谷誠ホームページ



矛盾の水害対策
新泉社・2750円
中島岳志先生推薦



水と土と森の科学
京大出版・2750円
高橋裕先生推薦

能登半島地震を受けて、地震国で原発が安全でないことが明確になりました。推進派も危険性を熟知すが、「王様は裸だとわかっているのにそうは言えない矛盾」を抱えています。詳しくは別紙！

新刊 **矛盾の水害対策**
公共事業のゆがみを川と森と人のいとなみからただす

今週の本棚



藻谷 浩介 評 (日本総合研究所主席研究員)

矛盾の水害対策

公共事業のゆがみを川と森と人のいとなみからただす

谷誠著 (新泉社・2750円)

今年も暖冬だ。この調子だと、一年の半分くらいは熱帯のようになり、豪雨災害が常態化しかねない。

大都市圏の市街地には、元々は川沿いの沼地や海の底だった場所が多いが、住む人は、上流にダムがあるから大丈夫と思うのか。

2019年秋の台風19号水害では、完成直後でまだほとんど空だった八ッ場ダムに水を貯め、利根川下流での水害を防がれたという。だが、貯水容量が約倍の小河内

人という種の存続にまで向かう考察

ダムのある多摩川では、下流で浸水が起きた。

貯水済みのダムから、予報を信じて事前に放流し、豪雨時に貯め直すのは、空振りすれば濁水を招く、難しい芸当なのだ。他方でダムは、建設地に根付いてきた生活を破壊する。しかも土砂で埋まれば貯水力は消え、その

裏返して海浜では浸食が進む。魚の遡上や、森林由来の栄養分の海への循環も阻む。水需要の減る時代に、水害防止だけを旗印にその建設を正当化し続けるのは、いまだき無理筋ではないか。というように、ちやもやと考えていたら、掲題書に出会った。

大なる自然に向き合う理系研究者としての謙虚さか、じむ。第1部を讀んで評者のダム理解は大筋で間違っていないと知り、第2部では逆に里山や森林についての素人考えを正された。国土交通省河川局の大方針は、

豪雨時の最大流量を予測し、それでも水が堤防を越えないように、上流にダムを設けて緊急時に貯水するというものだ。だがダムの運用は前記の通り難しい。机上の計算を上回る豪雨も来襲する。それで実際に水害が起きると、裁判では国は責任なしとされる。副作用無視でダムありきを押し付けつつ、水害時の結果責任は取らないというのでは、ダムの建設や運営の現場にかかるプレッシャーは増すばかりだ。その上に、人口減の日本では、新設増強どころか

既存インフラの維持更新の負担も、年々重くなっている。このように矛盾だらけの日本の水害対策。本当は水害にどう向き合ふべきか。終盤の第3部で著者は、哲学的な考察に分け入る。人類種特有にして、過ぎれば自

滅の元ともなる「改良追求欲求」。それをバックとする治水から、生物共通の「維持回復欲求」に則る、被災を前提とした対処へ。副作用を顧みず自己利益の最大化を図る「利己主義」から、自己利益だけではなく人類の種としての存続をも目指す「エゴイズム」へ。「立場」を守る者に結果責任は発生しない、という役人組織の責任観から、選択をした者が結果の責任を取るという普遍的な責任観へ。

その移行の先にあるのは、上流から下流までの利害関係者がテーブルについて当事者となり、自己利益を少しずつ通し合うように選択を行い、災害があれば維持回復への責任も少しずつ分かち合うという仕組みだ。水害対策の話に始まり、人類種の存続に向けた思索に広がる。漢流の水がやがて大海に出るがことさ読書の醍醐味をぜひ皆さんにも味わっていただきたい。

総括

地球・生物の相互作用によって生態系の定常性が維持されている
この歴史家通的な原理を基盤に現代社会の問題点を考察した

選択の自由による資本主義経済発展の非定常性は限界点越えを招き、
南北問題・地球環境問題が生じた 改良追及の抑制が課題となる

日本では、江戸期の里山循環モデルとその限界点越えの共有が
資本主義のつぎ足しの奥底にあるアイデンティティーとなっている
(国民国家のアイデンティティーは底が浅い)

世界中で国家間戦闘が発生、日本では合意形成の機能不全が目立つ
戦闘拡大や生態系の限界点越えによる飢饉が迫っている

未来に向けては、
資本主義の先に定常性の回復
と
他者への共感・人権の尊重
本発表では省略されているが
「矛盾の水害対策」第8章で言及
との両立が必要であるが、

当面は、ベクトルの向きを
改良追及抑制・合意形成徹底
に変えてゆくことが現実的

